顔

神戸大学附属中等教育学校　平松はるみ

澤田先生と私は同期生だ。正確に言えば、私が神戸大学に入学した年に、澤田先生は勤務校から神戸大学大学院に入学された。私たちが入学したのは、大学の入試改革が毎年行われていた頃で、さまざまな形で不本意入学者がおり、憧れの大学生活とは少し違う、ちょっと酸っぱい香りが漂う春だった。

大学生活が楽しくなり始めたのは、国語科の先生方や先輩と関わりを持ち始めた時だ。その頃、澤田先生と初めてお会いした。ちょっと前まで高校生だった私たちに、教える立場という新しい視点を見せてくださり、家族がありながら改めて学ぼうとする姿勢を教えてくださり、教師という職業に明るい光が差しこんだ。

大学を卒業し、兵庫県の山の中の高校に勤務した翌年から、「両輪の会」に参加させていただいた。澤田先生は理論に結びついた実践を温和に話してくださった。長時間に及ぶ会の時には、時には激しい意見の対立が起こったが、そのような時にも澤田先生は静かに新たな視点から意見を述べられ一同の雰囲気を変化させる力をお持ちだった。柔和と鋭敏のバランス、それが澤田先生だった。

三十歳に近づいた頃、出張先で澤田先生にお会いしたことがある。転勤を悩み、恋愛を迷い、大学院に行くべきか決めかねていた頃だった。何をやっても思い通りにいかず、駅までの道を一緒に歩きながら、少し愚痴っぽく話したように思う。その時、澤田先生が自分の腕を見せながら、「これは全部透析を受けた跡だよ。針も痛いし、長時間かかってしんどいよ。」と言われた。思い通りに進むことを当然のように望んでいた私に、ご自分の身体を見せながら優しく励ましてくださった。微笑の裏面にある苦悩、それが澤田先生だった。

澤田先生が角川短歌賞を受賞されたときは本当に喜ばしく、一緒に有馬で吟行したことを懐かしく思い出す。澤田先生が退職後に短歌指導をされていることを新聞記事でみつけ、申し込もうとした矢先の訃報だった。教員を続けていく上で常に目標としている先生である。教員の多面な顔を教えてくださった。心より感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。